
トライアル

高山ケータ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアル

【Nコード】

N3033BA

【作者名】

高山ケータ

【あらすじ】

平凡な日常を送る青年タケト。とある不思議な女性と出会い、さまざまな世界を旅することになる。行く先々には、数々の試練が待っていた。

始まり（前書き）

初めて小説を書きます。小学五年生のときから考えていた物語です。

始まり

「うわああああああ！」

暗い屋敷、雷鳴鳴り響く中、青年の叫び声がこだまする。

青年の腕の中には爪で引き裂かれ、血まみれの少女が抱かれていた。一年前まではこんなことになるなんて夢にも思わなかった。

僕の名前は滝沢タケト、年は十六、身長は百七十ジャスト。体型は少し筋肉質、これは幼いころから体操をやっていたおかげだ。

今現在、W高校、偏差値五十三、特に何か飛びぬけた人が通う学校でもなく、進学校としても中堅の、平均的な学生の通う学校の生徒だ。

髪型は黒髪のショートレイヤー、サラサラというわけでもない、直毛である。本人はスタイリングに変化がつけられないと、少しクセのある髪を羨ましがっている。目は一重だが、細い印象はない。そんなタケトが、部活の帰り道、とある不思議な女性と出会う。

この出会いは、彼の一生を決めてしまう出会いだった。

「その君。ちょっといい？」

そう言いながら、タケトの目の前に、どこからともなく現れた。

その女性は、茶髪でストレートで、腰まで届いていて、目はブルーである。二十代後半くらいで、きりりとした目で、身長はタケトより少し高い百七十五くらいで、服装は、スーツであった。

「君、魔法使ってみたくない？」

「え、ま、まほう？」たけとは少し驚きながら復唱した。

「魔法って、空を飛んだり、火の玉を出したりするやつですか？」

「そう、私は地球とは別の世界の、魔法が発達した世界からやってきたの。」

「あなたの世界じゃなかなか信じてもらえないと思うから、少し見せるわね。」

呪文を唱えたようだった。するとふわりと浮かんだ。

「そ、そんな、ゲームや漫画の世界だけかと思ってました。」

「そう、いろいろな世界があるの。」タケトは半信半疑だったが、話を聞いてみることにした。

「あつ、名前まだ言っただけじゃなかったわね。レイラ、レイラ・ウォーレイン。世界を移動できる魔法で、いろいろな世界を旅してるの。」

「僕は滝沢タケトといいます。でも、なぜ僕なんですか？僕に魔法なんて仕えるんですか？」

レイラは笑顔で、

「使えるわよ。あなたには素質がある。魔力を感じるわ。」

「僕が魔法」

タケトは勉強でも体操でも、芽が出たわけでもなかった。普通の人よりもちよつと出来る程度だった。

そんなタケトは、素質があると初めて言われて嬉しかった。何も無い僕が魔法を使えると思っただら、わくわくした。

「ちよつと説明するから、私の家に来てくれない？」タケトは言われるがままついていく。そこは、タケトの近所の広い空き地だったはずだった。

「ここって、空き地のはずじゃ！」タケトはうるたえながら聞いた。「魔法で何とかなっちゃうのよねー。それに、私の家お金持ちだし。」

「どうにかなっちゃうって」

タケトはなつかげながらも、目はきらきらしていた。

レイラに案内され、屋敷の中に入った。広いエントランスを見回しながら、一室に案内された。

その部屋も広く、短距離走が出来るくらいの書庫だった。

たくさん陳列された本の中から、一冊の本をレイラは取り出した。「この本、始まりの書っていうの。私の世界のエンデルシアでは魔法学校があって、その学校で初めて渡される本なの。」

タケトは渡された本をパラパラめくった。

「その本にはね、魔法の基本が書いてあるの。一ヶ月もあればマスターできるわ。そして、私と一緒に旅してみない？」
その問いに、タケトに葛藤や逡巡はなかった。

始まりの書をマスターする間、屋敷で練習を行った。自己防衛のために剣術も習った。

レイラ自身の戦闘スタイルは、RPGでいう武闘家と魔法使いを合わせたような、感じらしい。

一ヶ月の間練習の合間にいろいろな話を聞いた。例えば。

レイラは魔法学校のとくに攻撃魔法はいつもトップだったけど、補助、回復魔法はビリだったので、僕に苦手な魔法を覚えてもらって補ってもらって旅のお供にしたいとか。

「私には夢があって、私の世界で、約二千年前に世界の危機を救った、ネクロとフォビアみたいな、大魔道士になりたいのよねー。」
とか

エンデルシア人は、寿命が長いらしく、レイラが二百才だとかなど。そして始まりの書をマスターし、旅へ出ることとなった。

初めての旅

旅の日、剣とその世界に合った、服を渡され、装備した。剣はタケトのひざから下くらの小ぶりの剣だ

扱いやすいようらしい。服装は中世ヨーロッパ風のRPGによく出てくるような勇者のような服だった。レイラも魔道士みたいな口ブ姿だった。

「じゃあ、行くわよ。」

「はい。」

「ネクストゲート」

本当に一瞬で、瞬間移動のように森についた。

「ここはエランという世界なの。」

とこの世界の説明を始めた。

「魔法が発達した世界で、ここはロサリアね。」

「この国は、騎士団が有名なの。剣術の修練にびったりだと思うの。」

「

あっち。」

そういつて指した方向には、大きな城が見えた。行くわよとレイラが歩き出した。

少し歩くと、何か物音が聞こえた。近づいてみると、ウルフに囲まれた男女二人組みがいた。

「くそつ、囲まれちまったぜ。面倒だな。」

と男はいった。女のほうは息が切れていた。タケトはまず、剣でウルフを後ろからざくりと、剣を振り、一匹を倒した。その間にレイラは、メギドという広範囲に炎を撒き散らす魔法で、十匹まとめて灰にした。

「ふうー、助かったぜ。サンキュー。」

とツンツン頭の男が言った。ツンツン頭の男の方は、タケトより少し背が高く、グローブを装備している。格闘で戦うみたいだ。女の

ほうは、ショートカットで、細い剣を持っている。さっき見た限りでは、それほど剣の腕は良くなかった。二人とも軽装だった。

「オレは、レオン。こっちは。」ツンツン頭のほうはレオンというらしい。

「私はエリー。助けてくれてありがとうございます。」
そして、僕たちも自己紹介をした。

「これから私たち、ロサリアに行くの。あなたたちは？」

「あつ、俺たちもロサリアに行くんだ。」

「じゃあ、一緒に行かない？」

とタケト。タキトは同年代と判断したらしい。

「レイラさんも一緒なら心強いです。」

とエリー。この二人はあてもなくたびをしているらしい。レオンは魔法が使えなく、エリーは、回復魔法が得意らしい。

「へえー、剣術を学びに行くんだ。」

「そうなんだよ、剣の腕はまだまだ未熟なんだ。魔法もだけど。」
と恥ずかしそうにタケトは言う。

お互いに話しながら、ロサリアに向かった。特に何事もなく、二十分ほどでロサリアの城下町に着いた。

騎士団

ロサリアはエランの三分の一を占める強大国の三番目の都市だ。特に騎士団が有名で、この都市を取り仕切る騎士団のおかげで、この町は治安が良いとされる。ふとエリーが、

「ところでどうやって騎士団の人に教えてもらうんです？ レイラさん。あてでもあるんですか？」

するとレイラが得意げに、

「フッフッフ、実はロサリア騎士団の団長と知り合いなの。」

「え〜！ローヘン様と！」

と口をあんぐりさせるレオン。

「ローヘンって？」

何も知らないタケットがたずねる。

「ローヘン様を知らないのかよ！ 国王の次に有名だぞ。世界剣術大会で二度も優勝したんだぞ。」

「へ〜」

と相槌を打つがいまいちピンときていないタケットだった。

「ごめんくださーい。」

騎士団の宿舎の入り口で人を呼ぶレイラ。すると団員らしい角刈りの男が出てきた。

「どちら様で、ええ〜！ レイラ様！」

冷や汗をかき、苦笑いを浮かべながら、レイラにへこへこする角刈りの男。何かあったに違いない様子だ。そんな態度を気にも留めず、レイラは、

「ローヘンさんいる？」

「こちらにいますよ。どうぞどうぞ。」

こんな頑強な角刈りの男がへこへこするって、レイラは何者？

案内された作戦会議室では二人いた。一人は四十代くらいの白髪交じりのオールバックに、ひげをはやした、中年の男性と、

金髪のストレートヘアの長い髪。鋭い目つきだがとても美人な、二十代くらいの女性だった。

「レイラ、どうしたのかね？四年ぶりかな。」

嬉しそうにローヘンは言う。

「お久しぶりです。四年前はどうも。実は剣術指南してもらいたくて。」

「剣術指南！？これ以上強くなってどうするのかね？」

頭をポリポリかきながらローヘンは言う。

「いや、私じゃなくて、この子が。」

そうついいながらタケトを指差す。すると納得した様子で、ローヘンは、

「交換条件なんじゃが、最近手を焼いてることがあってのう。」

どうやら困った様子。

「手を焼いてること？」

「うむ、最近盗賊がロサリアを荒らしているのう。第一部隊が討伐にいったんだが、二十名全員やられてしまった。」

ほとほと困った顔でローヘンは言う。

「そこで、剣術を教える代わりに、レイラの手を借りたいんだが、どうかの？」

間髪いれず、

「いいですとも。」

レイラは答えた。

「いいなー、ローヘン様に教えてもらって。」

言いながらレオンがタケトを小突く。

「いや、わしじゃないぞい。教えるのはコーネリアスじゃ。」

隣にいるきれいな女性を指しながら、

「コーネリアスの腕はたしかじゃぞい。なんたって、二十七才の若さでロサリア騎士団の副団長になったんじゃないからな。」

「よろしく。」

初めてコーネリアスが口を開いた。

コーナーアスはこのとき、タケットに淡い思いを抱いていた。
剣術指南は次の日から行われた。

戦い

ローヘンの追加情報によると盗賊にはある組織がかかわっているらしく、その名は「ミスティー」。

ミスティーは禁忌の魔法を開発しているらしく、最も代表的な、人を生き返らせる魔法をさがしているらしい。

禁忌の魔法を使える素質のある人をさらったり、書物や秘宝を盗んでいるという噂だ。

それから二週間、みっちり剣術を、タケトは教えてもらった。なかなか筋が良いらしく、角刈りの男と、模擬戦をやり、互角まで戦えるようになった。コーネリアスやほかの団員から褒め称えられた。

その日の夜、コーネリアスとその一行四人は、それぞれ話をした。「オレは最強の格闘王になるんだ！」とレオン。

「私は回復魔法でいろんな国の戦争で傷ついた人たちを治したい。」とエリー。エリーは十六才だが、回復魔法には、目を見張るものがあるらしい。コーネリアスがタケトに話を振る。

「タケトは目標とか夢とかないの？」

そういわれるとタケトは視線を下ろし、

「うーん、今はあまりないかな。もうちょっと魔法を使えるようになりたいかな。」

そう、タケトには夢や目標がなかったのだ。平和な世界、恵まれた環境で育ち、お金にも困ったことがなく、漫然と過ごしていたタケトには。しかし、ある事件をきっかけに、強くなりたい、守りたい、という強い気持ちが生まれることになる。

そんな自信なさげなタケトをコーネリアスはしげしげと微笑みながら見ていた。

次の日、緊張が走った。

コーネリアスと一行は、ローヘンに呼び出された。例の盗賊団が現

れたらしい。

「やつらは今、サージス炭坑を根城にしているみたいだ。先遣隊として君たち五人に行ってもらいたいんじゃないか。」

険しい顔でローヘンが言うと、

「はい、わかりました。」

とコーネリアス。

「やってやろうぜ！」

とレオン。

「お役に立てるのならば。」

とエリー。タケトとレイラは顔を見合わせ、

「はい、いきます。」

サージス炭坑まで、ロサリアから半日ほどだ。夕方にはつくだろう。道中、皆、口をあまり利かなかった。天下のロサリア騎士団の一部隊を全滅させるほどの武力だ。緊張しないわけがない。そして日が暮れ始めたとき、森を抜け、炭坑に着いた。即座に、

「なんだお前は！」

と盗賊A。盗賊は七人、ボスらしき女が一人いた。

「お前らに名乗る名前はない！」

といいながらコーネリアスは剣を一ふるい。盗賊Aは倒れた。

「何すんだ！てめー！」

盗賊Bが叫び、それを合図に、ナイフや剣、斧などを持った盗賊たちが襲い掛かってきた。

「魔法を使うまでもないわね。」

とレイラは盗賊のアゴに右ストレート。一発KOだった。

残影拳、残像を残しながら、こぶしを繰り返すレオン。四、五発急所に決めて、KO。

エリーも傷を負いながらも、一人倒した。

タケトは練習を思い出しながら、剣を繰り返し、盗賊に深手を負わせ、戦闘不能に陥らせた。

「なんだこいつらは！」

「勝てるわけねー！」

などと叫びながら、残りの盗賊たちは逃げていった。一人のボスの女だけが残った。その女は、肩くらいまで髪で、黒色。目つきは悪く、何百人も殺してきた冷酷な目をしていて。身長はコーネリアスと同じくらいで、露出の高い服を着ていて、手には高級そうな剣を持っている。

「嘆きのゴートね。」

女を指差しレイラは言った。

嘆きのゴート、それは彼女の通り名であり、有名な剣士や、悪党などにつけられるもの。ほかに「紅蓮のキース」、「漆黒のクラビス」、「雷閃のセレス」、「マジックマスタールミナ」、など、特徴や戦闘スタイルなどで名づけられることが多い。レイラも例外ではなかった。

「あなたこそ、クイーンオブデストロイ、レイラじゃない。」

「その通り名やめてくれる。納得してないんだけど。」
と不服そうなレイラ。

「あらゆる世界の建物や、地形を変えているって、有名よ。あなたを倒せば私の名前もあがるわね。」

そして、剣を構えるゴート。ここは私が入るコーネリアス。レイラは一瞬で計算をした。タケト、レオン、エリーの三人を守りながら、ゴートを倒せるだろうか。いや、勝てない。五対一なのに分の悪い戦いだと思った。それほどまでにゴートの実力と悪名はすさまじかったのだ。

「レイラ、タケトたちを連れて逃げて。ここは私が食い止める。」
そういうとゴートに立ち向かっていった。それと同時に、タケトたちは、レイラにされるがまま走った。

コーネリアスは高速の斬撃を繰り返すが、ことごとく防がれる。互角のように見えるが、だんだんと、実力の差が始める。剣で受け止めていたゴートだったが、次第に鼻先でかわすようになってきた。
「私の愛剣ラグルのさびになりな！アイシクルエッジ！」

剣を上下に振り、鋭い氷の刃がコーネリアスを襲う。何を隠そう、ゴートの持つているラグールとは氷の魔剣なのだ。氷の刃がコーネリアスの胸にグサツと突き刺さる。しかし、一瞬のスキを見逃さなかった、コーネリアスの剣がゴートのわき腹に、浅く突き刺さった。コーネリアスはくず折れた。

「ちいっ」

とゴートは剣を鞘に収め、ネクストゲートでどこかへ消えていった。タケトは嫌な予感がした。胸がもやもやし、引き返さなければならぬ気がして、レイラの制止を振り切つて、サージス炭坑に駆け出した。息も絶え絶えのコーネリアス

「タケト、あ、あなたがスキだった。最期にあなたに会えて、ほ、本当に良かった。大好きだったよ。タケト。」
コーネリアスは事切れた。

翌日、コーネリアスの葬儀が行われた。

多くの団員に見守られながら、式は終わった。

「レイラさん、僕、強くなりたい。大切な人を守るくらい強く。」
涙を流しながら、拳を強く握り締めた。生まれて初めての感情だった。タケトは悔しいと思つたことがなかった。じぶんを責めたこともなかった。こんな風にして、憤りも感じることもなかった。不条理を初めて味わった。しかし、不条理は人を成長させる。この時から、加速度的に、剣の腕も魔法も伸びていくことになる。

タケトはローヘンからあるものを渡されていた。それは、コーネリアスの形見、名剣「シュトラウス」だった。

魔剣

「まだ気にしているの？」

「」

レイラの問いかけに、黙ったままのタケト。

騎士団の宿舎で四人、暖をとりながらの会話だった。

「オレも戦争で父ちゃんを亡くしてな、気持ちはわからなくもねーよ。」

しみじみ語るレオン。

「タケトは知り合いを亡くすのは初めて？」

「うん。」

「あなたの世界は平和だったからね。ショッキングなことかも。私
の世界のエンデルシアにも戦いはあるの。多くの同級生が亡くなっ
たわ。」

目を潤ませながら、レイラは語る。

「でも、相手は魔剣を持っていたから、しょうがねーよな。」

「そうね。」

魔剣の説明を始めるレイラ。魔剣とは、神器と呼ばれる武器のひとつで、他にも、聖剣や魔槍。霊槍などと呼ばれるものがある。

神器には、魔力や精霊などが宿っているといわれている。一振りです
炎をふきだしたり、一振りで突風やカマイタチを起こしたり出来る
ものもある。その威力ゆえ、神器は、国家間で争いが起きたり、高
値で取引されたり、盗難や強盗の対象になることも多々ある。

「そのシュトラウスもそうよ。どんな力が眠っているかどうかわか
らないけど。」

「僕決めたよ。」

「何が？」

と三人が口をそろえる。

「ミステイーを追う。そして、ミステイーの野望を阻止する。」

「明確な目標が出来たわね。」

「オレたちも手伝うよ。」

「うん、ミスティーに困っている人は、たくさんいるもん。」
旅の目的は決まった。

あくる日、ローヘンと騎士団に別れを告げ、ロサリアを後にした。

次の目的地は、アラリス王国。この国に、ローヘンよればミスティーの拠点があるらしい。

西へと向かい、アリー村を経由することとなった。

出会い

道中、タケトはレイラに中級魔法を教えてもらった。

人？には魔力があり、容量と回復力があり、容量以内であれば何回でも魔法は使えるし、回復力が高ければ、常時、魔力を消費するフレイという空飛ぶ魔法を使えるらしい。レイラによれば、タケトはかなりの容量と回復力があるみたいだった。

レイラの容量を千とするとタケトは三百くらいだ。

そんなことをしつつ、アリー村に着くが、アリー村でタケトは運命的な人と出会う。

「あー、あつたかいもん、くいてー。」

体をさすりながらレオン。

「そうね、そろそろまともな料理が食べたいわね。」

とレイラ。

「あつ、村が見えた！」

とエリーははしゃぎながら言う。煙が家からもくもくとあがっていた。食事の支度だろう。

四人は、ここ一週間、果実や獣の肉などを食べていた。ソロソロ飽きが来るころだった。

「あー、旅人だ！」

と外で、木の棒で戦いごっこをしていた子供たちが、口々に言葉を発した。

「どこからきたのー。」

「その剣さわらしてー。」

「まほうおしえてー。」

と、いっぺんに質問され、子供の扱いに慣れていないタケトが戸惑っている、一人の老人が現れた。

いかにもというようなひげに、薄い頭髪に、老眼鏡。知的な感じの老人だった。

「この村に、何のようかね？」

用心深く聞く老人。

すぐさま旅のいきさつを話すレイラ。

「ぬう　　ミスティーか。」

黙り込む老人。

「あつ、言い忘れたが、わしはこの村の村長じゃ。まあええ、村を案内しよう。」

今の間はなんだったんだろうと少し気になったレイラ。ミスティーと何か、因縁があるんじゃないかと推測した。

アリー村は、百二十人くらいの村だという。ロサリアとアラリスの国境の町、ラストに近く、三日ほどでいけるといふ。

しばし村を歩くと少し大きな家が見え、家の前に少女が立っていた。この少女を見たたん、タケトは恋に落ちる。一目ぼれというやつだ。

しょうじよはきんぱつで、ポニーテール。身長は百五十五、白を基調としたローブを着ている。そんなタケトをつゆしらず、少女は話しかけてきた。

「こんばんは。旅の方なんですつて。」

とても愛嬌のある、かわいらしい子だ。見とれているタケトをよそに老人は、難しい顔をしていた。

「よかつたら、うちに泊まっていったらいかがです。私一人じゃ大きい家ですし。一人で食事も味気ないですし。」

ヤッホーとレオン。しかしそれをさえぎるように村長が、

「ちよつと待てシャル。この人たちは、ミスティーを追っているのだぞ。」

シャルと呼ばれた少女は、胃がキュツと、しまる思いをした。しかし思いを振り払って、

「もう、あのことは気にしていません。」

あのことは、シャルの両親のことだ。シャルの両親は魔道士だった。

主に、魔法の開発である程度、成果をあげていたシャルの両親はミ
ステリーにさらわれたのである。もう四年前のことである。
「気にしてなければ良いのだが。」

夜

「どうぞ、四人ともあがつて。ご飯も用意しますから」

気丈に振舞うシャルだが、この四年間、身を切るような、思いですごしてきたのだ。思春期に両親がいない、それがどれほど子供に影響を与えるのか、計り知れないものがある。どれ程さびしい思いをしただろう。どれ程泣いただろう。どれほど、家族というものが、親というものが大切か、身にしてみてわかっただろう。味わったことのある人にしか分からない痛みがある。

シャルの家に入ると、たくさんの本棚と、そこに納められた本。魔道書らしい。居間で円を作り、軽く自己紹介をした。レイラから始まり、タケト、レオン、エリーの順だ。レイラの年齢に、びっくりしていたシャル。久しぶりの客人に、やや、興奮していたシャル。いつ以来だろう。

「私はシャルロット。十八歳、よろしくね。みんなからはシャルって呼ばれているの。」

実は、とシャルは、両親のことを話し始めた。張り詰めていく空気を聞いたタケトたちは怒りに満ちていた。タケトの頭の中は、許せないという言葉で、いつぱいになった。そしてシャルから私も連れて行ってほしいと頼まれた。魔道士の娘だから、魔法はある程度は使える。足手まといにはならないとシャルは言う。こんな日を心待ちにしていたのだろう。両親を探しにいけることを。

いいわよと、快諾するレイラ。残りの三人も異論はなかった。食事をし、シャルには久しぶりの団欒だった。こんなときが長く続けばいいなとシャルは思った。

夜が更けてきて、女三人は寝室、男は居間で寝ることになった。明かりを消して床に就く男二人。レオンが横になりながら、タケトに話しかける。

「なあ、オレってぶがないよな。レイラさんに守ってもらって。」

魔法も使えないし。」

僕だってふがないよと。と自信なくタケットも言う。

「オレたちがもつと強かったら、コーネリアスさんも死ななかつたかもしれない。」

「そうだな、僕たちがもう少し強かったら。」

悔しさをにじませる二人。ところでさ、と話を切り替えるレオン。

「お前、シャルのこと好きだろ。」

バカ言うなど、暗くてわからないが顔を赤くしているタケット。

「かわいいもんな、シャル。正確もいいし、お前がほれるのも分かるよ。」

激しく同意するレオン。レオンこそ、エリートはどうなんだよ。となんとなく聞くタケット。

「バツバカ、あれはただの幼馴染だよ。」

動揺するレオン。もう寝るぞとタケットに背を向けるレオン。

一方、そのころ、暗い天井を眺めながら、物思いにふけているレイラ。エリーとシャルは寝息を立てている。私がつとしっかりしていればと、男二人と同じように、コーネリアスのことで悔やんでいる。

そして、夜が明けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033ba/>

トライアル

2012年1月11日10時45分発行